

## 「花園天皇宸記」に表れる花園天皇の 口腔並に顔面の疾病について

戸 出 一 郎

花園天皇は、永仁五年（一二九七年）伏見天皇の第三皇子として生れ、正平三年（一二三四年）五十二歳で逝去した。

花園天皇は、歴代の天皇の中でもとりわけ学問を好み、諸学を修め、深く禅法を修業して徳を積み、謹厳精直、人倫の鑑ともいふべき有徳の人であった。

「花園天皇宸記」は天皇が自ら記した日記で、政治、典礼、学芸、宗教、疾病に関することがらが典雅な筆致で記されている。

「花園天皇宸記」のうち現在に伝存するものは、延慶三年（一二三〇年）十月より元弘二年（一二三三年）十一月に至る二十三年間におよぶが、その間欠佚するものがあるが、宸記は現在、宮内庁書陵部に収蔵されているが、

昭和五十七年から六十一年の間に、続群書類従完成会によって活字版として刊行された。拙論ではこの活字本を資料とした。

花園天皇は生来病弱で、日記には多くの病状が述べられている。中でも多いのは、風氣・上気・雜熱・咳氣・脚氣・瘡・口熱による顔腫・歯痛等であるが、全身の不調を訴える心神違例等の文字は特に多く、通算百三回にも及んでいる。

大部分の疾病については服部敏良博士が概略を述べられているので、拙論では博士が触れられなかった口腔と顔面の疾病について報告する。

宸記の中で最初に表れる口腔疾患は、応長二年（一二三二年）一月二十五日、十六歳の時で、口熱歯痛を発し、和氣全成の針治療を受けたものである。

次には正和三年（一二三四年）二月五日より八日まで、歯痛がおこり顔が腫れた。五日には和氣全成の診察を受け、六日には和氣仲成に見せている。兩名の意見によれば、ただの口熱でたいしたことはない、だから歯を抜くにはおよばない、ということだ。先年歯痛があった時、

丹波冬康は歯を抜かなければいけないと言ったが、このたびは全成・仲成両名の治療方針に従うこととした。八日には歯痛と顔腫は治ったが、口中にはなお腫れがあり、和気全成を呼んで診察させた。

その年、四月十七日に歯痛があり、丹波冬康を呼んで患歯を抜させた。巧みに抜かれたので全く痛みを感じなかった。誠に達人というべきで、およそ歯の治療に関しては誉れ高い医師である。

抜歯に関してはこれが唯一の記録で、医師による抜歯の記録としては「玉葉」における丹波経基について二番目のものである。

正和六年（一三二七年）には正月元日から口熱のため顔が腫れ、十四日に至つてようやく治癒を見た。

元亨二年（一三三三年）二月二日には左の顔面が腫れ、九日に和気全成が口中に針をし、和気蔭夏と共に灸をすえた。顔の腫れは十七日まで続いている。

「花園天皇宸記」中に、歯痛或は口熱を伴う顔面の腫脹の記録は、正和二年（十七歳）、正和三年（十八歳）、正和六年（二十一歳）、元亨二年（二十六歳）に残されている。

宸記に記されたこれらの症状は、恐らく口腔内の炎症、恐らく歯周炎によって顔面の腫脹を来したものである。処置として口中に針を加うというのは、膿瘍の切開か或は瀉血を施したものと思われる。

これらの診療にあたった医師としては、和気全成・仲成・仲景・蔭見、丹波冬康の名が挙げられている。

宸記は元弘二年、三十六歳の時まで現存するのみであるが、洞院公賢の日記「圓太曆」によれば、花園法皇は、死の一月ほど前にあたる貞和四年（一三四八年）十月二日、（五十二歳）、顔面が腫れて耳が聞こえなくなったという記事がある。

顔面の腫脹は死の直前までくり返し起きたものと思われる。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究室）